



Title	天貝義教先生を悼んで
Author(s)	神野, 由紀
Citation	デザイン理論. 2025, 85, p. 2
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100267">https://doi.org/10.18910/100267</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 天貝義教先生を悼んで

神野由紀

天貝さんとのお付き合いは、私が筑波大学芸術学研究科に入ろうと決めた時からになります。右も左もわからない当時の私に、デザイン史を学ぶならと、故・嶋田厚先生の研究室を勧めてくださったのは、他でもない天貝さんでした。

天貝さんは筑波大学芸術学群で故・阿部公正先生のもとで学ばれ、阿部先生が退官された後は、研究生として嶋田先生のゼミに長らく参加されていました。天貝さんから見ると当時の私は、何だか頼りない後輩が入ってきたな、と思われていたはずです。嶋田ゼミは研究室の正規の院生は私ともう一人の2名のみでしたが、天貝さんだけでなく、デザイン史、美術史、社会学、比較文化、芸術教育、建築、工業デザインなど、あらゆる分野の大学院生が参加する刺激的なゼミで、いつも研究室は座りきれないくらいの学生であふれていました。

天貝さんは、デザインや美学に関してとても博識で、社会学の院生とは一味異なる知見をお持ちでした。お人柄は大変きさくな方で、優秀な先輩方に囲まれて緊張していた私にも気軽に声をかけくださいました。

筑波大時代はヨーゼフ・アルバースの研究をされていたが、その後日本の工芸、デザイン概念の成立過程を丹念に調べられるようになりました。特に秋田に行かれてからは、「秋田で研究できることを探したい」ということで公文書館の資料を扱うようになったとお聞きしていました。博士論文の内容をまとめられた『応用美術思想導入の歴史』は、今でも度々参考にさせていただいています。近代初期における美術概念の生成過程に関する研究が盛んだった当時、応用美術・工芸概念の成立という視点を新たに加えたその意義はデザイン史において大きいものでした。

秋田公立美術短期大学（現：秋田公立美術大学）に着任され、しばらくお会いする機会がなくなりましたが、天貝さんと再びお会いするようになったのが意匠学会でした。大会で毎年のようにお会いできるようになり、皆で夜に飲みにでかけるのが恒例の楽しみでした。

昨年、一緒に学んだ恩師の嶋田厚先生を偲ぶ会が開かれた時、体調が悪く参加できないというお返事で心配しておりました。天貝さんご自身も退職後、これまでの自身の研究の集大成をおまとめになりたかったのではと思うと、残念でなりません。

天貝さんの訃報はあまりにも突然で、まだ心の整理がついていませんが、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。